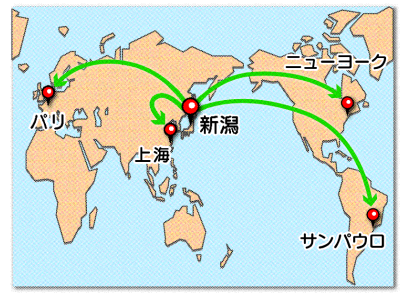
(C)新潟日報社　無断での転載、改変、複製、頒布を禁止します

グローバル にいがた　国際交流拠点から

新潟日報社が開設した米ニューヨーク、ブラジル・サンパウロ、中国・上海、欧州（パリ）の国際交流拠点などを通じ、海外で暮らす本県関係者から現地の様子をリポートしてもらい、毎月第１月曜日に紹介しています。また、新潟日報ホームページ「モア」にも掲載し、感想や意見を受け付けています。



from 北京

中川　徹さん
＝新潟市中央区出身＝

観光契機に相互理解

自治体国際化協会北京事務所で、日中の地域間交流や日本の地方自治体の中国における経済活動の支援などに携わり、１年４カ月が過ぎました。２０１２年の秋以降、日中関係はすっかり冷え込んでしまいましたが、地方、民間レベルの交流は一時の低迷を乗り越え順調です。特に注目すべきは観光分野で、日本を訪れる中国人旅行者は急増中。今年は過去最高を更新する見込みです。

６月に北京で開催された国際旅行博覧会では、日本の各ブースに旅行関係者らが列をつくるなど大変なにぎわいでした。夏休みの人気旅行先へのツアーは予約でいっぱいになったとのことです。また、日本への旅行経験者のほとんどが日本や日本人に対し良い印象を持つとも聞きます。

一方、中国を訪れる日本人旅行者は減少中です。国同士の関係が悪くなると、メディアの報道が負の情報中心になることも原因でしょう。私自身、赴任前は正直悪いイメージも抱いていました。しかし、文化や商習慣の違いには戸惑ったものの、北京は治安も良く、人との関係で嫌な思いをしたことは一度もありません。

「中国ってどんな国？」と聞かれると、一言では表現できない多様性の国といえます。13億人、56の民族が暮らす中国を平均化することは無意味であり、平均化することで逆に真実が見えなくなると感じます。実際に中国に来て、見て、感じることでメディアを通して見る中国とは異なる世界に触れられるはずです。

両国民の相互理解こそが国際交流の第一歩であり、観光はそのきっかけとなります。残り８カ月の任期となりますが、引き続き中国で日本の良さを売り込むとともに、自分が感じた中国を日本へ伝え、微力ながら両国の交流の推進に貢献したいと思います。

（中川さんは自治体国際化協会北京事務所所長補佐です）

６月に北京で開かれた国際旅行博覧会。自治体国際化協会の出展ブースは来場者でにぎわった

from ブラジル

山内　和子さん
＝ブラジル新潟県人会会員＝

W杯終わり 日常戻る

ドタバタ続きだったサッカーワールドカップ（W杯）ブラジル大会がようやく終わり、サンパウロの街も日常が戻ってきたようです。今もW杯に便乗してひと稼ぎしようというレストラン、ショッピングセンターが少なくありませんが…。

わがブラジルは残念ながら4位。日本も応援していたのですが残念でした。私が運営する日本語学校でも、生徒を出場するチームに分けてサッカーをする「校内W杯」で盛り上がりました。

学校関係でもW杯の「配慮」がありました。従来は7月の冬休み（ブラジルと日本は季節が逆なのですが）、ことしばかりは6月に繰り上げられた学校がけっこうあるのです。ブラジルの試合の日はもちろん？お休み。きっと、日本ではあり得ないことなのでしょう。学校を運営しているので他の学校のことながら「勉強のほうは大丈夫かしら」と心配してしまいます。

NHKの海外向け衛星放送を見ていましたが、スタジアムの工事の遅れに始まり、地下鉄のスト、W杯反対デモなどが連日のように報道されていましたね。日本の皆さんは「間に合うのだろうか」と思ったでしょう。でも結果はご覧の通り、何とか無事に終わりました。

地元ではそのような心配など、どこ吹く風。「何とかなるさ」のペースを最後まで貫きました。日本の皆さんからすれば「ルーズ」「無責任」に映るかもしれませんが、ブラジルの人々は「結果良ければ全て良し」なのです。

ブラジルのことわざに「人生はサッカーゲームのごとく、キック一つで運命が変わる」というのがあります。「一寸先は闇」の人生、あれこれ心配しても始まらない、ということなのでしょう。

その昔、日本で流行した言葉に「明日は明日の風が吹く」というのがありますね。日本の皆さんも将来のことはひとまず脇において、きょうという日を楽しんでみませんか？

（山内さんはサンパウロで日系の子どもたちが通う学校を運営しています）

サンパウロで行われたW杯開幕戦のブラジル対クロアチア戦の前に、クロアチアサポーターと記念撮影する筆者（右端手前）

from ロンドン

大竹　英子さん
＝三条市出身＝

英国流の「慈善活動」

英国では伝統的にキリスト教の奉仕、慈善の精神が文化として根付いているためか奉仕活動や募金運動が盛ん。個人や団体で、いろいろな人やグループ、機関などを支援するために寄付金を募る。病院や慈善団体のお世話になれば「今度は自分が」と恩返しのために寄付金を集める人も多い。運動の方法はさまざまで、日本人の発想とかなり違っている。そのユニークな点を私の身近な例を通して少し紹介してみたい。

娘の体操スクールが練習場を拡張したいが、費用がどうしても足りない。そこで資金集めの一環で考え出されたのが「お父さんたちの胸毛やすね毛をワックスで引っぺがさせてもらいまｓｈｏｗ（ショー）」。みんなの前で、スクールに通う子供のお父さんたちに体毛を抜かれる痛みに耐えてもらい、その意気込みに対して募金してもらうのだ。

もう一つの例は友人の住む村で開かれたオープンガーデンズというイベント。英国の長く、暗く、寒い冬を耐えた木々や花々が咲き誇る6月某日、村の有志たちが日頃丹精込めて育てている自慢の自宅の庭を有料で一般に公開した。来訪者は入園料約８００円を払うと公開されている庭をすべて見て回ることができる。集めた入園料は村が選んだ慈善団体に寄付される。

美しいイングリッシュガーデンをはしごして、時にはお茶や手作りケーキ（約２００円）をいただきながらその庭先で休んだりと、なんとも英国らしいひと時を慈善に協力しながら楽しむことができる。同時に主催者側も自慢の庭を披露してまとまったお金を集められる。

英国人はこのように趣向を凝らして、楽しみながら慈善活動を行うのが上手だ。慈善団体のほとんどはこうした寄付金で成り立っている。個人主義といわれる英国人だが、世のため、人のために生き、世話になったら恩を返す、そんな一面も併せ持った、実は義に厚い人々でもある。

（大竹さんはロンドン北東のコルチェスター市の市立高校に勤務しています）

手入れの行き届いたイングリッシュガーデン。時には慈善活動に一役買う

from NY

畠　純介さん
＝ＮＹ新潟県人会会員＝

人種や宗教の壁超え

畠（はた）純介と申します。恐らく私の苗字を「もたい」と読める人の割合は、新潟には多いのではないかと思います。新潟県出身の祖父は柏崎から米山に入った山間部で生まれました。ニューヨーク（ＮＹ）の郊外、ニュージャージー州に住んでいます。学生時代にアメリカ留学を経験し、合理的で伸び伸びした生活が気に入って、アメリカに合計21年ほど暮らしています。

ここにはヨーロッパ系、アジア系、ユダヤ系、アラブ系、アフリカ系と多人種、多宗教が混在しています。さまざまな人々が自由と成功を求めてやってきます。互いを尊重し合い、自由を守りながら暮らしています。

私には妻と４人の子供がおります。ちょっと変わったわが家の話をします。夫婦は日本人ですが、毎週教会に通う熱心なキリスト教徒。日本で英語を教えていた長女は大阪でなぜかイスラム教徒のトルコ人青年と出会ってその後結婚し、イスタンブールで暮らしています。昨夏、現地を訪れ、イスラム世界に触れてきました。

次女は先月インド人の青年と婚約し、来年インドとニュージャージーで結婚式をする予定です。彼はヒンズー教徒。ヒンズー教の結婚式は未体験ですが、今からインドに行くのを楽しみにしています。下の子供２人の結婚はまだまだ先ですが、どんなバックグラウンドの人と一緒になるのか楽しみです。大切な家族が人種や宗教の壁を超えて幸せに暮らしていることは実にうれしく、私たちに喜びを与えてくれています。

ＮＹを一度訪れてみてください。歩いているときっとワクワクしてきます。なぜなら、ここでは世界中の異なるバックグラウンドの人々のエネルギーがぶつかりあい、次々と新しいものが創り出されているからです。あなたも自分の枠を超えて違いを受け入れてみてください。きっとあなたの人生はさらに豊かなものになるのではないでしょうか。

（畠さんはＮＹでリーダー向けコーチングおよびライフ・コーチングをしています）

昨年７月にニュージャージー州の筆者自宅で行った長女夫婦（中央）の結婚式